

## 言語進化の歴史を探る

西山 豊

### はじめに

私が言語に興味を覚えたのは次のような事情による。私はブーメランの調査と研究をライフワークのひとつとしてきた。ブーメランが地球の引力に逆らって戻ってくる理由は歳差運動によるもので、コマがなぜ倒れずに回り続けるのかという物理現象と関係があるが、ここでは詳しくは述べない。この研究の副産物として室内で正確に戻せる紙製ブーメランを独自に考案することになる。研究が一段落するとブーメランの魅力をひとりでも多くの人に伝えたいと思うのは自然の成り行きであった。まずブーメラン全般については一九九四年度に『ブーメランはなぜ戻ってくるのか』(ネスコ刊)にまとめ<sup>1)</sup>、紙製ブーメランについてはB4サイズ裏表のチラシにまとめた。学会や研究会などに出かけるときは、いつもこの資料をかばんの中に入れていたのであった。

一九九九年から二〇〇一年にかけて学内で国際交流委員の仕事をする事になり、多くの外国人と接する機会をもつことになる。国際交流の主な仕事は研究者や学生の交換協定を結ぶことであるが、いずれの場合も事務的

な作業を終えるとあとはお互いの国の文化や歴史について歓談するのが常である。私は歌をうたうのが苦手であるので、自分の考案した紙製ブーメランを披露することになっている。厳正なる儀式の場になんと不謹慎だと思われるかもしれないが、相手も研究者、私の無鉄砲もすぐさま理解していただける。交換協定調印のときは緊張がみなぎっているが、ブーメランの説明をしだすと表情が自ずと緩んでくるのである。

二〇〇〇年一月二日、韓国ソウル市にある漢陽大学校と交換協定を締結したときは学長柳志星氏に、同年一月二日、中国大連市にある東北财经大学と締結したときは校長邱東氏に、二〇〇一年三月三〇日、中国北京市にある首都経済貿易大学と締結したときは校長張理泉氏に会談後の懇親会でそれぞれブーメランの紹介をした。私は専攻が数学で自然科学系の人間であり、相手方は人文社会系であるので物理学は理解できないのでは、興味をもたれないのではと危惧したがそれは杞憂に終わった。遊びや文化は専門領域を超え、国境を越えるということを実感した。その他、学内で開かれたスウェーデンのイエテボリ大学との研究シンポジウムの懇親会の席でもブーメランを紹介し、ブーメラン外交が両国間の国際親善に一役買った。

このように国際交流委員の仕事をして痛感したことは、説明のためのチラシが日本語であること、私が話せる言葉が日本語だけであることのもどかしさであった。ブーメランの説明は手振りがともなうので日本語でも通じないことはなかったが、ブーメランはどうして戻ってくるの、と聞かれたときまったくのお手上げだった。日本人に日本語で説明することでさえ至難の業であるのに、ましてや外国人においてをやである。説明書が相手国の母国語で書かれていてなおかつ母国語で会話できればこちらの説明がもっとスムーズにいくのではなかったかと悔やまれた。私がいままで書いてきた論文や記事はすべて日本語であり、これでは日本人にしか通じないのである。世界中の人に伝えるためには、その国の人を用いる言語で説明しなければならぬ。折り紙が日本の文化として世界に知られているように、紙製ブーメランも日本の文化として世界中の人に伝えたいという気持ちがあり、これ以降は熱病のように、私の外国語熱が始まることになる。

#### 一 外国雑誌に掲載されるまで

まずはじめに何を翻訳すべきかを考えた。私はすでに科学の啓蒙書を中心に七冊の単行本を出している。ものによっては世界でも通ずる内容のものが何点かある。いつか英語に翻訳したいと機会をねらっていたが、自らの英語力の乏しさでそれを実現するには至らなかった。ある翻訳会社から打診があり、そこそこの費用で翻訳が可能であることを知った私は、翻訳のための準備にとりかかることになる。自分の下手な英語で書いたものを日本の論文雑誌に載せるといのではない。外国の人が読んでくれる外国の論文雑誌に載せるのだ。

私がこれまでに書いてきたものでオリジナリティの高い三つの論文に絞った。それは、「ブーメランから始める物理」「五弁の謎を解く」「不動点の作図に関する定理」というものである。後の二つは今回の論考と関係ないので説明はまたの機会ということにする。まずは翻訳にあたって母体となる日本語の論文を完成することであった。学術誌や雑誌に発表してきた論文をそのまま翻訳してもよかったが、それは日本人に読んでもらうためのものである。外国人から見ただけのわかりやすい文章にするために幾分か手直しをした。本文にして四〇〇字詰め原稿用紙で三〇枚、図の脚注などを整理して翻訳会社に発注した。

私の論文が翻訳可能かどうかテストをかねて最初の数枚を訳してもらった。それを読んだ感じはやはり外国人が書いた英語の匂いがした。最近の翻訳業者の環境は日本人と外国人が共同で作業するために精度のよい翻訳となっている。研究者は研究に専念して翻訳は専門家にまかせるといふスタイルがいいのではと思った。翻訳の続きを行ってもらうことを伝えた。このようにして、「ブーメランから始める物理」の英語翻訳

*Physics Beginning with Boomerangs*

を完成した。

さて、この英語論文を外国の雑誌に掲載してもらおうわけだが、これが実現するには随分と月日がかかった。何しろ私は外国の研究者に知り合いがないし、国際的な学会にも入っていないし、雑誌の編集部ともコンタクトが皆無である。そこで図書館へ行き自然科学系の外国雑誌にはどのようなものがあるかを調べた。

“Science”, “Technology”, “Education”, “Physics”などをキーワードにして数百の雑誌の中から五〇雑誌にまで絞った。この間の作業に約一週間かかった。この中には権威あるイギリスの雑誌ネイチャー (Nature) やアメリカの雑誌サイエンス (Science) が含まれている。各雑誌の正式な雑誌名、編集部の住所、国名などをマイクローンフト社のエクセル (MS-Excel) で作表し、宛名印刷はアクセス (MS-Access) で行った。

英語論文を五〇部コピーしてそれぞれの封筒に封入してそのまま送ろうかと思ったが、しばし考えた。五〇の雑誌はどれも国際的な学術雑誌である。世界中から多くの論文が投稿されてくるに違いない。私の論文がそのうちの単なるひとつに過ぎなかつたら、おそらく編集部の机上に封も切らずに置かれたままであるだろうし、もしかしてゴミ箱に捨てられるのではという想いが私の脳裏をよぎった。封筒の中に入れるのは英語論文だけではだめである。是非とも掲載して欲しいというこちらの熱意が編集部に伝わらなくてはならない。どうせ送るならブーメランの魅力を説明するあらゆるものを同封しようと思いつき、つぎのような関連資料を同封した。送り状、英語論文、著者プロフィールに加えて紙製ブーメランのサンプル二本、その説明書、実際に飛ばした映像などがある。飛ばした映像についてはビデオテープにする予定であったが、かさ高くなるのでCD-ROMで可能かどうかを検討した。幸いにして私が以前に出演した毎日放送の番組「楽園図鑑」のものが比較的コンパクトにまとまっているので、それをアナログからデジタルに変換してCD-Rに焼き付けた。約三分間の映像が四〇メガバイトの情報として保存でき、パソコン画面に容易に表示できるようにした。これで準備は完璧であった。二〇〇一

年七月二十七日、私は海外の五〇の雑誌編集部に一斉に郵送した。

返事は意外と早かった。どの雑誌もそうであるが投稿論文はいったん受付番号がふられ、執筆者には受理したことの通知をしてレフリーにまわすのである。論文が受理されることと掲載されることは別である。編集部の段階で論文が返送されてくるもの、レフリーの段階で返送されてくるものがあるが、一ヶ月ほどの間にアメリカ、イギリス、オランダ、ドイツ、フランス、イタリア、インド、パキスタン、イラン、オーストラリア、南アフリカ、ハンガリーなど世界中から返事がかえってきた。郵便物としてまたはEメールとしてその形式は編集部によって異なるが、いずれも不採用の通知ばかりであった。

文面を読んでみると、とりあえずこちらの熱意は伝わったようである。興味ある話題ですとか、ユニークで面白いですという寸評のあとに、しかしながら雑誌の性格とミスマッチであるとか、投稿論文が多すぎて掲載に至らずという体のよい断りばかりであった。返送されてくる封筒の中には、こちらが同封した紙製ブーメランだけが抜き取られているのも何通かあった。紙製ブーメランを編集部で結構楽しんだのであろう。それだったら、なぜ掲載してくれないのだ。国内だったらすぐにでも編集部に行つて説明するのにと悔やまれるばかりであった。このようにつきつきと不採用の返事ばかりが続き、私の心がブルーになっていた同年九月二一日の早朝四時、カナダのトロント大学にある科学雑誌からEメールが入った。貴方の論文を掲載しますので電子媒体で再送付してください、というものであった。私のEメールは携帯電話に転送していたので採用をすぐに知ったのである。

このようにして、私にとってはじめての英語論文

*The World of Boomerangs* (タイトルは改変)

がレフリー付の外国雑誌に掲載されることになる。<sup>2</sup> 掲載に至るまでは本学図書館の橋本稔氏に協力していただい

たことを感謝します。また今回のように一度に五〇雑誌に投稿するという方法は禁じ手であり、ブーメランのケースのみに通用するもので一般には薦めることはできないことを付け加えておく。

## 二 多言語翻訳を開始する

英語論文は研究成果を外国の研究者に知らせるには有効である。しかし、世界中のすべての人々にブーメランの魅力を伝えるには不十分である。論文では難解であるし分量が多すぎる。もつと簡単に説明できる方法はないかと考えた結果、B4サイズ裏表のチラシにまとめた紙製ブーメランの説明書を翻訳することに気付いた。この説明書は室内で遊べる「三枚翼の紙製ブーメラン」の作り方、飛ばし方、飛び方、キャッチの方法、注意などの文章とともに、原寸大のブーメランの型紙、投げ方のイラストなどを掲載したもので、これを読めば小学生でも理解できる内容のものである。これで十分ではあるが、裏側にブーメランはなぜ戻ってくるのかの簡単な説明とブーメラン協会のホームページ・アドレス（URL）を載せた。裏側を理解するには高校生程度の知識が必要だが知的好奇心のある小学生ならある程度はわかる。今後、英語以外の多言語に翻訳することも予測して、いままです書きにしていた日本語版のものをすべて電子媒体にし、なおかつ図をパソコン上でレイアウトできるように変更した。このようにしておけば、翻訳を依頼するときはテキスト部分だけを見たのみ、テキストをもらえば方でレイアウトできるからだ。

まず英語版からはじめた。日本語テキストはA4サイズ用紙で二枚程度、英語論文に比べると内容、分量とも格段に楽なものである。自分で翻訳してもよかったが、多言語翻訳の作業に入るときは、英語版がオリジナルになるケースが多いので、拙い翻訳はやめ専門の翻訳会社に頼んだ上、翻訳されたものを別のアメリカ人に査読してもらおうという二重のチェックを行った。こうして英語に翻訳されたテキストをパソコン上でレイアウトし、B4サイズ裏表の英語版説明書が完成することになる。

英語版を完成した時点で、これで世界中の人々が理解できるだろうか考えた。確かに英語はインターナショナルな言語である。ところが二〇〇〇年から二〇〇一年に訪問した韓国や中国の人はわかるであろうか、各国のインテリ層は英語を学んでいるので理解できるだろうか、小学生には母国語しか通じないのではと判断した。そこで英語以外の言語についても翻訳してみようと思うようになった。

世界中にはどれだけの言語があるのだろうか。言語学者の専門家ならそれを即座に答えることができるだろうが、私はまったくの素人である。手ごろな本として『イミダス二〇〇一別冊付録…世界史アトラス』（集英社刊）を参考にして調べた。世界の国別データというのがあり、国名、建国、面積、人口、首都、首脳、GNP、一人当たりGNP、議会、通貨、住民、言語、宗教、大使館・総領事館、国際電話番号の一五項目が国ごとにコンパクトにまとめてある。この中から国名（Country）、人口（万人、Population）、公用語（Language）を抜き出し、同じ公用語を用いる国（Countries）、それらの総人口（万人、Populations）を集計した（表1）。同じ公用語を用いる代表国としては人口が一番多い国とした。ただし、人口、総人口は識字率などの関係で公用語を話せる人口を意味しない。

これによると世界には独立国が一九三ヶ国あり、人口は五九億六〇〇〇万人であり、公用語の数は全部で七七言語ある。言語（公用語）はその国にはほぼ依存し、国によっては第二公用語をもつものがあるが集計上、第一公用語だけとした。一説によると先住民の言語まで含めると世界には五〇〇〇以上の言語があるといわれている。これらすべての言語に翻訳するというならそれは気の遠くなる話であるが、七七言語は不可能な数字ではない。英語は確かにインターナショナルな言語である。しかし、英語を公用語とする国は四〇ヶ国で人口にして六億二〇〇〇万人である。国の比率では世界の五分の一、人口の比率では世界の九分の一である。人口では中国やイン

表1 世界の言語

No.	Country	Population	Language	Countries	Populations
1	China	125359	Chinese	2	127572
2	India	99751	Hindi	1	99751
3	USA	27823	English	40	61972
4	Mexico	9658	Spanish	20	36209
5	Egypt	6265	Arabic	20	26493
6	French	5862	French	20	23630
7	Brazil	16796	Portuguese	7	20932
8	Indonesia	20702	Indonesian	1	20702
9	Russia	14620	Russian	1	14620
10	Pakistan	13479	Urdu	1	13479
11	Bangladesh	12766	Bengali	1	12766
12	Japan	12628	Japanese	1	12628
13	Germany	8210	German	4	9735
14	Vietnam	7751	Vietnamese	1	7751
15	Filipin	7425	Tagalog	1	7425
16	Korea	4685	Korean	2	7026
17	Turkey	6438	Turkish	1	6438
18	Iran	6297	Persian	1	6297
19	Ethiopia	6278	Amharic	1	6278
20	Tanzania	3292	Swahili	2	6233
21	Thai	6024	Thai	1	6024
22	Italy	5764	Italian	3	5766
23	Ukraine	4995	Ukrainian	1	4995
24	Myanmar	4502	Myanmar	1	4502
25	South Africa	4210	Africans	1	4210
26	Poland	3865	Polish	1	3865
27	Netherlands	1580	Dutch	3	2643
28	Afghanistan	2586	Pashto	1	2586
29	Uzbekistan	2440	Uzbek	1	2440
30	Nepal	2338	Nepali	1	2338
31	Malaysia	2271	Malay	2	2303
32	Rumania	2245	Romanian	1	2245
33	Sri Lanka	1898	Sinhalese	2	1924
34	Madagascar	1505	Madagascar	1	1505
35	Kazakhstan	1492	Kazakh	1	1492
36	Yugoslavia	1061	Serbian	2	1449
37	Cambodia	1175	Cambodian	1	1175
38	Greece	1053	Greek	2	1129
39	Czechoslovakia	1027	Czech	1	1027
40	Hungary	1006	Hungarian	1	1006

No.	Country	Population	Language	Countries	Populations
41	Belarus	1003	Belarus	1	1003
42	Somalia	938	Somali	1	938
43	Sweden	885	Swedish	1	885
44	Bulgaria	820	Bulgarian	1	820
45	Azerbaijan	798	Azeri	1	798
46	Tajikistan	623	Tadzhik	1	623
47	Israel	610	Hebrew	1	610
48	Georgia	545	Gruziya	1	545
49	Slovakia	539	Slovakian	1	539
50	Denmark	532	Danish	1	532
51	Finland	516	Finnish	1	516
52	Laos	509	Lao	1	509
53	Kirgiz	486	Kirghiz	1	486
54	Turkmenistan	477	Turkmen	1	477
55	Croatia	446	Croatian	1	446
56	Norway	446	Norwegian	1	446
57	Moldova	428	Moldova	1	428
58	Armenia	380	Armenia	1	380
59	Ireland	375	Ireland/Celt	1	375
60	Lithuania	369	Lithuania	1	369
61	Albania	337	Albanian	1	337
62	Latvia	243	Latvia	1	243
63	Mongolian	237	Mongolian	1	237
64	Macedonia	202	Macedonia	1	202
65	Slovenija	198	Slovanian	1	198
66	Estonia	144	Estonia	1	144
67	Swaziland	101	Swazi	1	101
68	Bhutan	78	Dzongkah	1	78
69	Luxembourg	43	Luxembourg	1	43
70	Malta	37	Malta	1	37
71	Iceland	27	Icelandic	1	27
72	Vanuatu	19	Vanuatu	1	19
73	Samoa	16	Samoa	1	16
74	Kiribati	8	Kiribati	1	8
75	Seychelles	8	Creole	1	8
76	Andorra	6	Catalunian	1	6
77	Tuvalu	1	Tuvalu	1	1
Total				193	595991

注：人口、総人口は公用語を話せる人口を意味しない

表2 翻訳済み言語

No.	言語 (フォント名) 説明書のタイトル	代表国
1	日本語 (MS明朝) 紙ブーメランを飛ばそう!	日本国
2	英語 (Century) Let's Boomerang!	アメリカ合衆国
3	中国語 (SimSun) 让纸做的回飞镖飞起来吧!	中華人民共和国
4	韓国語 (Batang) 종이부메랑을 날려보자!	大韓民国
5	ベンガル語 (SulekhaT) বুমেরাং জগতে কিছুক্ষন!	バングラディシュ人民共和国
6	フランス語 (Times New Roman) Jouons au boomerang !	フランス共和国
7	ドイツ語 (Times New Roman) Lassen Sie einen Papier-Bumerang fliegen!	ドイツ連邦共和国
8	モンゴル語 (Times New Roman) Боомерангаар торлоцгооё!	モンゴル国
9	ベトナム語 (VnTime) Chúng ta hãy chơi bumerang!	ベトナム社会主義共和国
10	タイ語 (Angsana New) มาเล่น บูเมอแรง กันเถอะ!	タイ王国
11	スペイン語 (Century) ¡Lancemos el bumerán!	メキシコ合衆国
12	ロシア語 (Century) Запустим бумеранг!	ロシア連邦
13	アラビア語 (Arabic) دعنا نعلم البومرنگ!	エジプト・アラブ共和国
14	ポルトガル語 (Helvetica) Vamos lançar bumerangues!	ブラジル連邦共和国
15	インドネシア語 (Century) Mari Bermain Bumerang!	インドネシア共和国
16	イタリア語 (Century) Lanciamo il boomerang!	イタリア共和国
17	ヒンディー語 (Shusha) चलो बूमरंग करे!	インド
18	ハンガリー語 (Arial) Hajtsunk papírbumerángot!	ハンガリー共和国
19	オランダ語 (Times New Roman) Laten we gaan boemerangen!	オランダ王国

字がほとんどであるので救われる。ハングル文字は日本のひらがなより歴史が浅く馴染めないが、表音文字としては体系的によくできていて、少し勉強すれば発音できるようになる。NHK教育テレビのハングル講座を何度も聞いていると韓国語は日本語の遠い方言のようにも聞こえる。語順など文法は日本語とほぼ同じで中国語より理解しやすいかもしれない。

ドイツ語は大学生のとき第二外国語として選択したので大体わかった。またフランス語は独学で入門を少しか

ドの方が格段に多いのである。このようにして私は英語版以外の説明書を完成することに興味移っていくのであった。

七七言語の中で日本語版と英語版は完成したが、残る七五言語をどうするかである。翻訳会社に依頼すればいいという考えもあるが、費用も高くつくし、ブーメランを広めるという本来の意図から遠ざかるので、なるべくボランティアな方法はないかと模索し始めた。幸いにして日本の大学には多くの外国人留学生在が学んでいるし、研究者も国際学会に参加する機会が多くなっている。そういう人たちの協力を得ながら可能な限り低コストで翻訳していくことを目指した。

その結果一九言語にまで翻訳が完成した(表2)。これらすべての内容を掲載するには紙面の都合上不可能なので、説明書のタイトル「紙ブーメランを飛ばそう!」についてのみ書き上げ表にした。三番目以降の言語は日本語版または英語版のテキストから翻訳されていると理解されたい。高が一九言語であるが、これだけでもすべて異なった言語であることが実感されるであろう。言語が違うということは文化や歴史も違うということである。いまここで翻訳された言語にはじめて出会ったときの素朴な感想を断片的ではあるが記録に留めておくことは、今後の研究にとって意義が大きいと感じるので、以下、言語の特徴などを記述していくことにする。

中国語は漢字できている。日本語のひらがなに対応するものがないだけ文字数が少なくコンパクトである。いわゆる漢文であるので漢字だけを眺めていると中国語を知らなくても三割くらいは理解できる。ただし漢字は画数が多いので現在の中国語では簡体字が用いられていて、私の名前の「豊」は「丰」にまで省略されていてなんとなくものたりない。発音は四声というのがあり、これは中国語をしっかり学ばなければ実際に会話できない。韓国語はハングル文字できている。日本語のカタカナのようである。韓国を訪問したとき、看板や表示がハングル文字一色であったので圧倒されてしまった。隣国であるのにこれほどまで違うのかと。その反面、中国は漢



じつたのでなんとなくわかった。どちらも辞書さえあれば理解できる。

ベンガル語とモンゴル語とベトナム語は大阪府立大学に留学生としてきていて院生に翻訳してもらった。ベンガル語はバングラディシユの公用語である。バングラディシユは旧東パキスタンから一九七一年に独立し人口が日本とほぼ同じで国旗が似ていて（緑地に赤丸）なんとなく親しみがもてる。翻訳されたものを見て嘩然とした。まったく読めないのである。文章の特徴としては五線譜に書いたように横方向に一本の線が連なっていることである。これは文字の上下方向のゆれを無くすには有効である。数字に特徴があり「8」のように見えるのが4であり、「9」のように見えるのが7である。私たちになじみのアラビア数字は世界共通かと思っていたが、これを見てすくなくならずのカルチャーショックを受けた。参考までにアラビア数字の1234567890をベンガル語で表記すればつぎのようになる。

১২৩৪৫৬৭৮৯০

後に説明するヒンディー語の数字表記はまた違う。数字の表記についてどのように進化したのかを調べてみるのも面白いかもしれない。

モンゴル語に翻訳されたものを見て、一瞬ロシア語かと思った。表記がロシア語と同じキリル文字であるからだ。留学生に本当にモンゴル語かと尋ねると、旧ソ連邦の時代にモンゴル文字はすべてキリル文字に変更された。自身はすべてモンゴル語でロシア人にはわからないという。ソ連邦が崩壊した今、モンゴル文字を復興させようとする文化運動もあるという。ベトナム語に翻訳されたものを見て、これもまた驚いた。アジアの国なのにフランス語のような感じを受けたのだ。ベトナムは第二次世界大戦以前、フランスの植民地下にあった。そのためかベトナム文字が強制的に消滅させられたのかもしれない。同じアジアの民族としてその国の歴史や文化が歪められていることに憤りと寂しさを感じる。言語の侵略性についてはいずれ取り上げる予定であるが、歴史上において

大国が他国を侵略する場合、武器と宗教と言語の三つで侵略するという。<sup>3</sup>文字や言語は非常に大切な文化遺産である。

タイ語は娘の知人を通じてタイ人に翻訳してもらった。タイ国からEメールで送られてきたタイ語のテキストを見て、音符のような印象を受けた。自身はまったくわからない。タイは王国で外国の侵略をほとんど受けたことがなくタイ文字が残っていて、なんとなく安心できる。これが文化というものだ。「こんにちは」はタイ語で「サワディカー」という。タイに二回旅行で行っているが覚えた言葉はこれだけである。会話の語尾に特徴があり最後に「カー」をつける。当地のラジオ放送を聞いていて「〜カー」「〜カー」という音ばかりが気になり、まるでカラスが鳴いているように聞こえた。言語は文字と音声が大きな構成要素であるが、音声から言語を調べてみても面白いのではと思った。各言語には音声の特徴があるはずだ。

ここでフォントについて触れておこう。言語を表記するフォントについては、日本語は「MS明朝」を、英語などの欧米語は「Century」または「Times New Roman」を用いるが、アジア、中東、アフリカなどの地域の言語はその言語に固有なフォントが必要である。中国語は「SimSun」、韓国語は「Batang」、ベンガル語は「Sulekat」、タイ語は「Angsana New」、アラビア語は「Arabic」、ヒンディー語は「Shusha」などである。以前は各言語に対応するワープロのソフトが必要であったが、マイクロソフト社のウインドウズXP (Windows XP) は多言語対応になっていてフォントが充実していて同じキーボードで世界中の言語が入力できるようになっている。まさにパソコンの威力で、今回の私の言語研究には大いに役立っている。

翻訳作業は徐々にではあるが一〇言語まで進んだ。これらは七七言語の中からアトランダムに選んだものであるが、世界の主要言語について翻訳する必要性を感じて表1を検討した。公用語を英語とする国は四〇ヶ国であるが、ついで多いのはスペイン語の二〇ヶ国、アラビア語の二〇ヶ国、フランス語の二〇ヶ国、ポルトガル語の

七ヶ国などである。公用語の国数が多いということは過去の歴史において侵略や植民地化の度合いを示している。また人口が多いのは中国の一三億であるが、インドの人口は一〇億もある。一〇億人すべてがヒンディー語を話せるわけではないが、ヒンディー語の翻訳を先にすまなければならないと思った。

スペイン語の特徴は疑問文や感嘆文は文章の前後に疑問符や感嘆符を付けることである。このことを知っておくとスペイン語の文章はすぐ見分けがつく。ポルトガル語はスペインと隣接しているのでスペイン語と類似しているのではと思われるがまったく異なる。むしろイタリア語の方がスペイン語に近いといえよう。また、中南米でポルトガル語を用いるのはブラジルだけというのは、一七世紀にスペインとポルトガルが中南米に進出し領土分割した結果である。ロシア語は旧ソ連邦の国全体に通じる言語であるかといえれば必ずしもそうではない。ソ連邦は多民族国家の集合体であったので、ウクライナ語、ウズベク語、カザフ語などはロシア語と別言語である。

アラビア語の大きな特徴は文章を右から左に書くことである。表2のアラビア語表記のところを参照するとよい。パソコン画面ではカーソルが右から左に移動する。文章だけでなくレイアウトまで左右が反転してしまうのだ。右から左に書くため疑問符まで左右反転している。私たちは横書きの文章で左から右に書くのに慣れているので少し戸惑ってしまう。左から右と、右から左とどちらが正しいのであろうか。これは茶道の裏千家と表千家のようなもので二つが同時に成り立つのである。日本でも寺院に行くと右から左に書かれた書道の掛物を見ることが出来る。大事なものはこれら二つの流派を互いに認め合うことであり、どちらか一方にしようとする文明の衝突が起こるのである。アラビア語のすべてが右から左という訳でもない。二桁以上の数字は左から右であり、ホームページ・アドレスのURLも左から右である。

インドネシア語の表記は英文字であるので英語のように見える。インドネシアには二五〇以上の種族言語があるが、統一言語としてインドネシア語が用いられている。ヒンディー語はインドの公用語である。表記はベンガル語に少し似ている。文章が横方向に一本の線が連なっているように見えるのは、上下方向のゆれを無くすための工夫なのだろうか。インドでは他に補助公用語として英語があり、地方公用語が一六ある。

翻訳は一七言語まで進み、残すところ六〇言語となった。一七言語の中には主要言語がほとんど含まれているので国数、人口ともに世界の過半数を越すことができた。しかし、当初の目標はすべての人々に「紙製ブーメラン」を広めることであるし、言語進化の研究からも資料としてすべての翻訳が必要である。そこで一気に翻訳の数を増やそうとして、翻訳に関する資料を日本にある外国大使館、領事館あわせて四六に郵送した。これが実現できれば四六言語が追加できることになる。ところがほとんどの大使館、領事館は「国際親善の意義は認めますが、翻訳業務は行っていません」という説明で資料が返送されてきた。そして翻訳業者を紹介するだけであった。外国大使館といえども窓口は外務省の役人で日本人であろう。外務省役人の腐敗ぶりが国会で問題になっていただけに、やはりこのルートでの翻訳は全滅なのかと半ば諦めていたところ、ハンガリー大使館から電話があった。「忙しいので翻訳が一ヶ月ほど遅れますが、いいですか」と。「本当にボランティアで引き受けていただけののですか」と尋ねると、「そうですよ」とあっさり答える。文化を理解するこういう素晴らしい国もあることを知った。翻訳者は日本語も話せる Ms. Horváth Gyöngyi という女性の方であった。ハンガリーはノーベル賞受賞者の多い国でもある。

オランダ語の翻訳は同僚の藤本寿良氏の協力で実現できた。彼が国際学会で何人かの研究者にブーメランの資料を渡したところオランダの研究者 Sanne Smits 氏が翻訳を快く引き受けてくれた。オランダ語はドイツ語に似ていた。Eメールで送られてきたオランダ語のテキスト文をレイアウトし、英語の Many Happy Returns のオランダ語訳である Heel veel geluklike terugkomsten とぶう標語を紙製ブーメランに貼り付けて郵送したところ、久しぶりに楽しく遊びましたという返事がかえってきた。こういう国際交流はなんと経験しても嬉しいものであ



る。藤本氏に感謝します。

こういうわけで、現在のところ翻訳が完成したのは一九言語となった。これ以外に作業中のものとして、翻訳は完成しているがフォントが入手できなく手書きの状態に残っているネパール語、知り合いに依頼してあるアルメニア語、グルジア語、ミャンマー語などがある。一気に七七言語まではいかないが日数をかけて楽しみながら翻訳作業を続けていきたい。

### 三 言語進化の研究に向けて

世界には公用語が七七あり言語総数は五〇〇以上あるとも言われている。もしも言語がひとつであったら、コミュニケーションがもっと楽であり、民族間の誤解や対立もなく平和な地球になるであろう。誰しもそのように考えるが、それを実現しようとした人がポーランドの眼科医ザメンホフである。彼は一八八七年、エスペラント語という人工言語を考案した。エスペラント語は特定の言語の使用者に言語的優位を与えないようにという平和主義的理想をかざしてつくられたもので、ラテン語を中心とするインド・ヨーロッパ語族の言語に基づいて整理考案されたものである。個人的な共鳴者はいるが理想とはうらはらに実現には至っていない。

単一の言語にまとめるのは不可能と思われる。現在は英語を公用語とする国が四〇ヶ国ありグローバル化とともに英語がインターナショナルな言語になりつつある。英文字はアラビア文字やヒンディー文字に比べると表記がシンプルである。ただし、私が英文字に慣れてるだけで、もしもアラブ諸国に生まれ育ったならアラビア文字の方が簡単であるというかもしれない。また英文字二六文字は表音文字であり、表意文字である漢字より覚えるのが楽である。こういう意味で英語がエスペラントのような役割を果たすのではと期待するが、アラビア語、ヒンディー語、中国語には言語とともに固有の文化や社会や歴史が付随するので単純に英語が単一言語とはなら

ないであろう。

エスペラント語がだめなら手話はどうかと素人的に考えた。言葉は通じなくても手振り、ジェスチャーは通じるはずだし、ボディーランゲージというものもあるではないかと空想した。ところが手話に関する文献を読んでみるとこれは大いなる誤解や空想であることがわかった。「手話は世界共通」だと思っるのは間違いで日本人には日本手話が、アメリカ人にはアメリカ手話があり、両者の手話には会話がまったく通じない。手話を覚えて世界旅行ができる并希望してもそれはまったくの誤解であるという。「木」を表すのに日本手話、アメリカ手話、中国手話、デンマーク手話ではまったく異なり、数字の「三」を表すのに日本手話、アメリカ手話、中国手話で違うのだ。手話は人間の言語の一つで、ジェスチャーや身振りとは根本的に違うことを理解すべきである。

エスペラント語がだめ、手話言語がだめということでは音楽はどうだろうか。映画や音楽、美術など喜怒哀楽など感情に近いところは世界共通かもしれない。また数学などの記号言語も世界共通である。話がわき道にそれたが世界には多数の言語が同時に存在するし、存在し続けるであろう。これが現実である。

言語はいつ生まれたのだろうか。人間はサルからヒトになる過程で直立歩行と伴に大脳が発達し、その結果、火と道具とことばの三つを獲得したといわれている。とすると言語の起源は人類の起源と密接に関係する。人類の起源はアフリカ説が有力であるが、アフリカのどこかで言語が発生し、それが次第に分化、拡散していったという説（一元説）と、ほぼ時を同じくしていくつかの地域で言語が発生したという説（多元説）がある。

言語はまず音声言語として生まれ、また単語だけであったかもしれない。それから文法的なものができ、文字が発明されて文字言語が確立されていく。人類の生誕から長い長い年月を経て現在の世界言語ができたのである。世界の言語はインド・ヨーロッパ語族、シナ・チベット語族、アフリカ諸語、セム語族・ハム語族、マライ・ポリネシア語族、ウラル語族・アルタイ語族、日本語などに分類されているが、どのようにしてこのような言語族

に進化、発展したのであろうか。答えは出ないようだが魅力的な研究テーマである。生物が地球上で進化して多様化したように、言語にも言語進化というのがあり、ダーウィンの生物進化論を参考にしながら検討するのもいいであろう。ただし、言語は政治、経済、社会、文化、歴史などの人為的な要素が複雑に絡んでいることも無視できないだろう。この論考は私がこれから始めようとしている言語進化の調査、研究のための序論としたい。

【付記】 これまで言語を主に文字言語から眺めてきたが、音声から入る言語の研究もいずれは必要であろう。関西エリアで放送されているFMラジオ放送局にFM・COCOLO(七六・五MHz)というのがあり、アジア諸国を中心に一五ヶ国語放送をしている(この番組審議会の委員長は国立民族学博物館初代館長の梅棹忠夫氏である)。また、世界多言語放送についてはNHK衛星第二放送でも生のワールドニュースが聞ける。これらの音声デジタル音声として入力し編集しデータベース化すれば、音声学からみた言語の研究が進むかもしれない。

- (1) 西山豊『ブーメランはなぜ戻ってくるのか』、ネスコ、一九九四年。
- (2) Nishiyama, Y. *The World of Boomerangs*, Bulletin of Science, Technology & Society, Vol. 22, No. 1, February 2002, 13-20, Sage Publications.
- (3) R・M・W・デイクソン『言語の興亡』、岩波新書七三七、二〇〇一年。
- (4) 田中春美など『入門ことばの科学』、大修館書店、一九九六年ではヒンディー語の話者は二億人とある。
- (5) 神田和幸など『基礎からの手話学』、福村出版、二〇〇〇年。

## あとがき

研究所には「七人の侍」がいたそうです。本庄栄治郎京都大学教授・吉川秀造同志社大学教授・江頭恒治滋賀大学教授・堀江保蔵京都大学教授・黒羽兵治郎大阪府立大学教授・宮本又次大阪大学教授・三橋時雄京都大学教授の面々です。三船敏郎は、やはり本庄博士？ ちよっとタイプが違ってしまうか。シブイ志村喬がふさわしいかもしれません。誰がハンサム木村功かは問わずにおきましょう。創設者の一人であった黒正巖博士が一九四九年九月に急逝され、研究所再開は、宙に浮いたままでした。それを救ったのが「七人の侍」だったのです。周りには、若い野武士たちが一杯居ました。今は、還暦・古稀を過ぎた一流の研究者の方々です。

一九二九年七月に本庄・黒正・菅野和太郎彦根高等商業学校教授・吉川・松好貞夫同志社大学教授の五氏を委員として「経済史研究会」が発足し、同年一月には月刊『経済史研究』の刊行を始めました。

京都帝国大学農学部教授であった黒正は、私財を投じて農学部隣接する土地を購入して研究所を建設し、一九三三年五月一日に晴れて開所式を迎えました。代表理事には本庄が就任し、理事として黒正・菅野・中村直勝第三高等学校教授の三氏が名を連ねました。そして、戦前の困難な時期にも「経済史研究」の革新と実証に努めてきました。

戦後、研究所は黒正が初代学長を務めた大阪経済大学に移管されました。この間、黒羽兵治郎(所長在任期間一九七〇～八五)、山田達夫(同一九八九～九七)、松村幸一(同一九九七～九九)らの歴